

家内が、俳句に凝って珍しく続いている。

最近カルチャーセンターや結社で俳句を学ぶのは、男性でなく女性が多いと聞く。私は俳句は男性の趣味、短歌は女性の趣味と理解してきたが、最近両方とも女性の領域になったようだ。

セントポーリアに嵌り、エレクトーンを習い、木彫りをやっていたが、途中で投げ出していった家内が、何故か今俳句に夢中になっている。

私が、俳句から足を洗ったのは数年前である。小説を書くようになったことも理由だが、独り善がりの屁理屈を付ける長老や叙情的表現を嫌う主宰の意見に反論する内に嫌気さし、己の未熟を棚に上げ、紹介されて入会した某結社だったが、俳句は不向きと悟り二年で退会。私もようやく小説に集中しようと思つたのも理由である。

椿山荘と芭蕉庵両方に、家内に付き合つて出掛けたのは、梅雨の合間の曇天の一日である。

二、三日前に仲間と椿山荘の「螢の夕べ」晚餐会に参加した家内は、夜で山縣有朋公縁の庭園を眺めることが出来なかつた。山縣公は和歌も嗜み造園にも詳しい文化人だった由である。京都無隣庵、小田原古希庵、目白椿山庭園、三園を合せて山縣三名園と呼ばれている。

椿山荘の案内パンフレットを見て、松尾芭蕉の居宅、いわゆる芭蕉庵が椿山荘のある文京区関口二丁目にあることを家内は知つたようだ。

東京には、二つの芭蕉庵がある。

一つは深川の芭蕉庵で、もう一つが関口の芭蕉庵である。俳句を趣味とする家内が、芭蕉庵に興味を抱いたのも無理はない。私は深川の芭蕉庵を知っていた。何故なら結社の東京句会の例会は、何時も深川の芭蕉庵で実施されていたからである。懐かしくなつたので、可能なら、二つの芭蕉庵に行つてみようと思案した。

藤田観光直営の椿山荘にはホテルと結婚式場やレストランがあり、手入れの行き届いた素晴らしい庭園が客を惹き付ける。東京メトロの江戸川橋駅を下車。神田川沿いの東西に細長い江戸川公園を散策しながら、裏玄関の冠木門に至る。椿山荘の風情ある裏玄関から庭園を覗く。

冠木門とは、武家住宅に用いた門の形式で、室町時代は將軍屋敷の通用門であつたが、江戸期には下級武士集団の住居の質素な門に用いられたという。小さな受付風の小窓が在つて、係りの人が居るので一寸気後れする。有名な京都や金沢の庭園が有料なのを知る人は、ここも有料と錯覚し中を覗いただけで尻込みしてしまう。臆せず係りの男性に会釈して中に入る。

散策前無茶庵にて十割蕎麦と、庭を窓から眺めながら、味わい深い静寂感を堪能した。繋ぎ無しの十割蕎麦は一日二十食限定である由。

庭園内は無料で誰でも鑑賞できる。散策しながら七福神の石仏、羅漢石、庚申塔、秩父山系より湧き出す古香井、椿山の名に恥じない小高い丘の上の三重塔、清水注ぐ丸型大鉢を廻る。

再び冠木門から外に出て、芭蕉庵に向つた。途中奇妙な物体を動かす中年男性に逢つた。最初見た時、それはラジコンの模型かと思つた。機械仕掛けの様に、路上を這うようにして物体が近付いてくる。寄ると後ろ足に赤い靴を履く大型の陸亀(蹴爪陸亀)と判明した。何とも微笑ましい光景である。どうやら中年男性は、ペットの亀の散歩を日課としているらしい。

芭蕉庵は、冠木門から百メートルも離れていなかった。正面の東門は閉まり、門脇に文京区教育委員会会の立て札があり「関口芭蕉庵」と読める。右に曲がり急坂「胸突坂」を僅か登つた場所が、目的の芭蕉庵西門で、そこが入口だった。入口に何の表示もない。果してその引き戸が開くのか、閉まっているのかさえ不明である。

事前調査で、この戸が開くのを知る者しか受入れず、来訪者誰でも歓迎の姿勢は窺がえない。

いや静かな回遊式庭園の日本の美と、神格化芭蕉の句碑に籠められた俳諧の心を守るために、止むを得ず客を選別する様な雰囲気さえある。

芭蕉は、延宝五年(一六八〇)、神田川改修工事に参加し、安楽寺に居住後「龍隠庵」と呼ばれたこの庵に住んだとされている。

内部に芭蕉三十三回忌の芭蕉の木像を祀る芭蕉堂、直筆短冊を埋めた「五月雨塚(芭蕉翁の墓)」、二百八十年祭の「古池や」芭蕉句碑がある。

回遊式庭園の中央に「ひょうたん池」、崖下の透明な湧き水を受ける石鉢、中国伝来の太い猛宗竹林が愉しめる。現在の建物は、二度火災や戦火に見舞われ再建されたものである由。

芭蕉が実際に居住したという深川の芭蕉庵よりも、果して本人が住んだのか定かでないにしても、雰囲気的に芭蕉の弟子達の敬慕の情が感じられた。関口芭蕉庵の方が何となく秘密めいて楽しめる。この庭で、暗示的な珍しい茸を発見した。

茸は猛宗竹の落葉の上にタラリ三つ程、黒い頭を垂れ、芭蕉や弟子の射精後のマラの如くなのである。黒い冠がマラの亀頭に見える。異なるのは、マラが白いレース網のスカートを穿いてる点である。家内と顔見合わせて失笑した。

SNS(Social Networking Service)で、茸の名を問うと詳しい会員から、竹林に生える「衣笠茸」別名「虚無僧茸」との答えを得た。

これで逆検索すると、白い網目状のスカートを拡げる美しい印象的な数枚の写真に出会う。

通称「茸の女王」とも称される由で、白い玉子状の中心が割れ、茸柱が迫出して成長し、頭部から網目スカートを拡げ、やがて萎れて倒れる様の画像、この間時間にして三時間を微速度撮影した画像も発見した。茸が萎れて倒れる様は、旅に病んで逝つた芭蕉の霊であるまいか。

中国では、茎の部分を高級料理の食材として用いるとあつた。関口芭蕉庵を訪れ、デジカメに収めた一枚の写真に、奇妙な体験と妾を囲つたという芭蕉の御霊に想いを馳せた。了